

ヨーロッパの国ぐににおける宗教と道徳の多元主義*

——理論的考察と実証的知見——

Wolfgang JAGODZINSKI**

真 鍋 一 史***

I. はじめに

1. 「科学」と呼ばれる人間の知的営為においては、これこそが究極の真理であるといったものを確定することは困難である。「社会科学」も、その例外ではない。そこで、本稿では、「宗教の本当の意味 (the true meaning of religion)」とか、「宗教の本当の定義 (the true definition of religion)」とかをめぐる「終わりのない議論 (endless discussions)」には立ち入らない。

2. 社会科学の領域において、「宗教」という研究対象について観察・記述・分析を行なう場合、一般に、つぎの3つのレベルが区別される。

(1) マクロ・レベル：具体的にいえば、このレベルは、さらに、2つに分けられる。

①ある特定の宗教の「教義・教理 (doctrine・dogma)」のレベル

②「宗教的な社会」と「世俗的な社会」という「社会」のレベル

(2) メゾ・レベル：教会や宗教共同体 (religious community) —— 宗教集団、宗教団体、教団など —— の組織のレベル

(3) ミクロ・レベル：この個人の属性 (a property of an individual) のレベルでは、「宗教」ではなく、「宗教性 (religiosity)」という用語が用いられる。

本稿では、以上の3つのレベルのうち、「ミク

ロ・レベル」に焦点を合わせる。

3. このような「ミクロ・レベル」の宗教性については、これまでさまざまな「概念化 (conceptualization)」と「操作化 (operationalization)」の試みがなされてきた。

例えば、Glock と Stark は、「宗教性」をつぎの5つの次元 (dimension) に区別した (Glock and Stark, 1965)。

- ①宗教的信念 (religious belief)
- ②宗教的实践 (religious practice)
- ③宗教的知識 (religious knowledge)
- ④宗教的経験 (religious experience)
- ⑤道徳的結果 (moral consequence)

Glock と Stark は、道徳的な「規範 (norm)」や「行動 (behavior)」は宗教に由来するものと考え、それを「宗教性」の次元の1つに含めた。しかし、道徳のすべてが宗教に由来するものではないことが、実証的な研究をとおして明らかにされてきた。そこで、本稿では、「宗教性」と「道徳性 (morality)」をそれぞれ別の次元として位置づける。

そして、「道徳性」以外の4つの次元については、これまでの実証的な調査データの分析が、主として、「宗教的信念」と「宗教的实践」をめぐってなされてきたということを踏まえて、本稿の「データ分析」も、この2つの次元に焦点を合わせる。

*キーワード：宗教多元主義、道徳多元主義、マクロ・メゾ・ミクロ・レベル、世俗化理論、宗教変形理論、宗教市場理論、宗教的实践、宗教的信念、新しい宗教／スピリチュアリティ／人生の意味

**ドイツ・ケルン大学教授

***関西学院大学名誉教授、青山学院大学地球社会共生学部教授

4. 以上から、本稿では、つぎの3つの課題に取り組む。

①ヨーロッパにおける「宗教の変化 (religious change)」に関する諸理論を概観するとともに、そこから主要な検証可能な諸仮説を抽出する。

②「宗教の変化」に関する諸仮説を、調査データ——「質問紙法にもとづく大規模なさまざまな国を対象とする国際比較調査 (large scale cross-national comparative questionnaire surveys)」のデータ——を用いて実証的にテスト (empirical test) する。

③「宗教の変化」の問題と関連づけて、最後に、「道徳の変化 (moral change)」——「道徳多元主義 (moral pluralism)」と「道徳相対主義 (moral relativism)」の出現——の問題を実証的に検討する。

II. 宗教の変化に関する諸理論

本稿では、宗教の長期的な変化に関する理論として、「世俗化 (secularization) 理論」「宗教変形 (transformation) 理論」「宗教市場 (market) 理論」の3つを取りあげる (Pollack and Olson, 2008)。これら3つの理論は、ともに「宗教多元主義」の方向を予測する。まず、「世俗化理論」からは、従来の「信仰論」に加えて、「無神論 (atheism)」や「不可知論 (agnosticism)」といったさまざまな考え方がでてくる。つぎに、「変形理論」は、「伝統的な宗教」と「新しい宗教」をめぐるさまざまな宗教の考え方を含んでいる。最後に、「市場理論」は、宗教市場の自由化にともなう宗教性の多様な形態 (form) の出現を示唆している。真鍋 (2010) は、この領域における文献研究にもとづいて、これら諸理論の内容について詳細に検討し、それぞれに対する疑問・批判・反論のポイントを整理した。したがって、ここでは、これら諸理論の内容については、実証的な調査データによるそれらの確認という本稿の目的にとって、必要最小限度の記述にとどめる。

1. 世俗化理論：宗教の衰退と消滅

世俗化についての古典的な理論からするならば、「宗教は、迷信と同じように、近代化の進展

にともなって衰退し、最終的には完全に消滅する」という。このような命題は、いわゆるフランス啓蒙主義の影響にもとづくものであり、19世紀の宗教批判の典型的な内容であり、社会科学の「知見」というよりも、人びとの「信念」と呼ぶべきものといわなければならない。そして、宗教社会学の領域において、このような意味内容での世俗化という考え方をそのまま受け入れる研究者は少ない。

本稿では、以下の「実証的な研究」のための準備作業として、つぎの3点を明確にしておきたい。

(1) 世俗化については、単一の理論 (a single theory) といったものがあるわけではない。

(2) 世俗化理論は、「科学的な法則 (scientific laws)」にもとづいて構築されたものというよりも、多くの相互に関連した「趨勢仮説 (trend hypotheses)」にもとづいて構築されたものである。そして、K. Popper (1967) によるならば、このような「趨勢仮説」は、科学方法論的にはきわめて問題のあるものである。そうだとするならば、「世俗化理論」は、いわゆる「科学的な理論」というよりも、「歴史的な記述」というべきものであろう。こうして、「世俗化理論」は、ヨーロッパにおける過去数世紀にわたる宗教の趨勢 (つぎに述べるように、とくにその「マクロ・レベル」における宗教の趨勢) を「記述」してきたものといわなければならない。しかし、そのような「宗教の趨勢」が将来も継続するかどうかは、全く別の問題である。

(3) 世俗化理論の多くは、「マクロ・レベル」あるいは「メゾ・レベル」の宗教現象を対象としてきており、「ミクロ・レベル」に焦点を合わせたものは少ない。しかし、この「ミクロ・レベル」の宗教現象こそが、本稿において実証的に取りあげようとしているものにほかならない。そして、その場合は、「人びとの宗教的信念のレベルの低下」や「教会の礼拝出席率の低下」などが実証的に検証可能な仮説ということになる (Dobbelaere, 1981; Wilson, 1976, 1982, 1985; Bruce, 2011)。

2. 宗教変形理論：新しい宗教の出現

「世俗化理論」と「宗教変形理論」との違いが、

どこにあるかということ、それは「宗教」という用語で意味するもの——宗教の定義——の違いにある。つまり、前者では、「世界宗教 (world religion)」「伝統宗教 (traditional religion)」「既成宗教 (established religion)」をもっぱら意味するのに対して、後者では、いわゆる「新宗教」も含めて、それをより広く捉えようとする。

こうして、「宗教変形理論」は、時代とともに宗教は衰退するというのではなく、「新しい宗教」が「古い宗教」に取って代わる (replace) という考え方をとる。

例えば、Luckmann (1991; 1995) は、「伝統的な宗教の衰退は、新しい宗教性——政治的イデオロギーやサイコセラピーを含めて——の出現をとまなう」と考えた。

さらに、Inglehart (1990; 1997) は、Luckmannとは異なる理論的考察から、同じように「変形仮説」に到達する。それは、「脱物質主義の社会 (post-materialistic societies) では、『安心 (security)』や『安全 (safety)』よりも『人生の意味 (the meaning of life)』の方がもっと重要な問題となる」というものである。

3. 宗教市場理論：経済学的アプローチ

この理論は、これまでの2つの理論と違って、宗教の変化は、「需要 (demand)」によって決まるのではなく、むしろ「供給 (supply)」によって決まると考える。宗教への需要は、時間的・空間的に一定である。ところが、さまざまな社会でその供給は異なる。経済の場合と同じように、宗教市場が自由化されている社会では、宗教多元主義の広がりによって、宗教の最大供給が可能となり、その結果、人びとの宗教性は増大する。つまり、供給が大きくなれば、需要も大きくなる。教会出席率の高いアメリカ合衆国がその例である。逆に、西ヨーロッパの国々には国教会 (state church, established church) や国家助成教会 (state subsidized church) の形態がとられてきたので、教会出席率は低くなってきた、というのである (Iannaccone, 1988; 1990; 1991; Stark and Iannaccone, 1997; Finke and Stark, 1992)。

Ⅲ. 実証的な調査データの分析

1. 世俗化理論からの諸仮説の確認

(1) 「宗教的实践」の次元のデータ分析

i) データ分析の方法

①ここでは、世俗化の程度を捉える指標 (indicator) として、「少なくとも1週間に1回は教会の礼拝に出席する (weekly church attendance) という選択肢を選んだ回答者の%」を用いる。

②実証的な調査データとしては、ALLBUS (シカゴ大学の GSS: General Social Survey と同じ問題関心に立つドイツ GESIS の「一般社会調査」)、European Election Studies などのデータを用いる。

③データ分析の対象国としては、この領域における先行研究を踏まえて、「オランダ」と「西ドイツ」を取りあげる。

④「時代」の推移とともに、それぞれの「世代」において、回答の%にはどのような変化が見られるかを捉えるために「コーホート分析 (cohort analysis)」を行なう。ここでは、「コーホート」を同じ歴史的な時代に生まれた同一年齢層と捉え、それを10年きざみに分けてみた。なお、先行研究を踏まえて、オランダでは最も年配の世代を「1906年以前の生まれ」、最も若年の世代を「1956年-1965年の生まれ」とした。そして西ドイツのカトリックについては、最も年配の世代を「1899年以前の生まれ」、最も若年の世代を「1969年-1978年の生まれ」とした。

ii) 結果の読み取り (図1A: オランダと図1B: 西ドイツ)

①時代の推移にともなう変化を見ていくなれば、どの「世代」のグラフをとっても、「教会出席」の回答の%の右下がりの傾向を見ることができ。

②その変化の時系列的なパターンは、2つの図を詳細に検討するならば、「オランダ」と「西ドイツ (のカトリック)」で、やや異なるものであることがわかる。それは、一方の「オランダ」においては、1970年代以降、「教会出席」の%の低下はなだらかな右下がりの形で進行してきたが、他方の「西ドイツ (のカトリック)」においては、

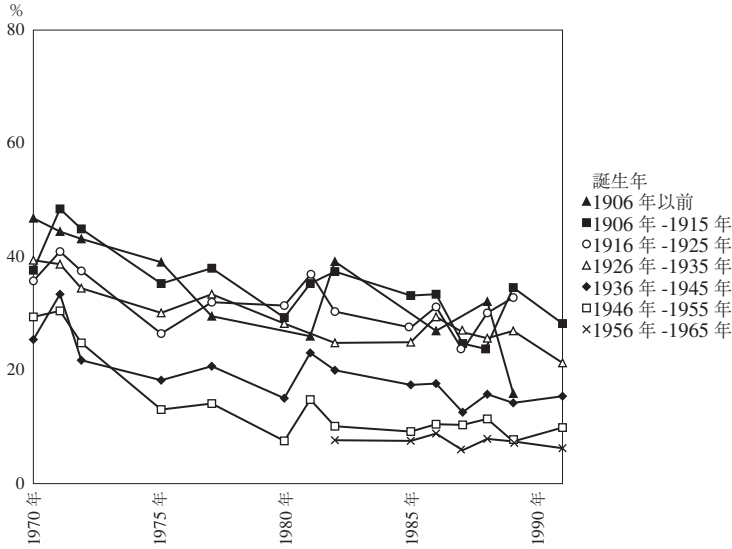


図1A オランダにおける宗教の変化（1970年－1991年）
「一週間に一度は教会の礼拝に出席する」という回答の%

データ：ALLBUS, Election Studies ほか

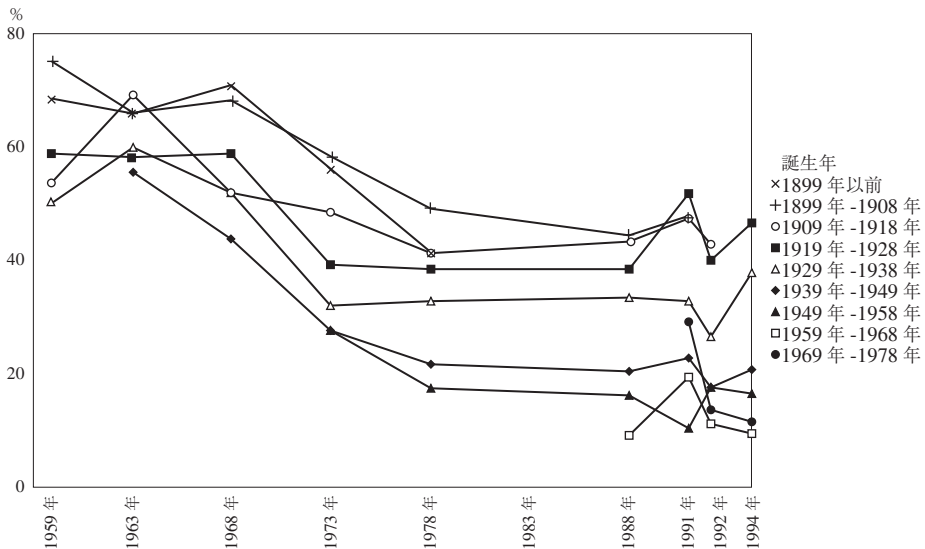


図1B 西ドイツ（のカトリック）における宗教の変化（1959年－1994年）
「一週間に一度は教会の礼拝に出席する」という回答の%

データ：ALLBUS, Election Studies ほか

1960年代半ばから1970年代半ばにかけて、その%に急激な低下が起り、その後はそれがほぼ横ばいのままで継続する形となっている、ということである。

なお、ここでは、西ドイツのプロテスタントの回答の結果は図示していない。それはプロテスタ

ントの場合は、「教会出席」の%は、すでに第二次世界大戦の直後にきわめて低いものとなり、その後、それはほとんど変化していないからである。

③以上から、このような「教会出席」についての回答の%の時系列的な低下を「世俗化」の指標

とするかぎり、「世俗化仮説」は、ヨーロッパの国ぐににおいては、調査データを用いて実証的に確認することができたといえるのである。

(2) 「宗教的信念」の次元のデータ分析

i) データ分析の方法

①「宗教的信念」の次元に関しては、「宗教的実践」の次元の場合のような「繰り返し調査」にもとづく「縦断的なデータ (longitudinal data)」が利用できない。そこで、「世界価値観調査 (World Values Survey: WVS)」の1990年調査データという「一時点調査」にもとづく「横断的なデータ (cross-sectional data)」の分析をとおして、時系列的な変化を推測 (inference) するという方法を取る。

②WVSでは、「宗教的信念」に関する質問項目として、「神 (God)」「天国 (heaven)」「地獄 (hell)」「悪魔 (devil)」「死後の世界 (life after death)」「罪 (sin)」「霊魂 (soul)」を、それぞれ信じているかどうか、という7つが用いられている。いうまでもなく、これらの諸項目は「宗教的な教義・教理」に対する「信念」を捉えようとするものである。そこで、それぞれの項目について、「信じている」とした回答に1点、「信じていない」とした回答に0点を与えるという操作をするならば、「宗教的信念」についての0点 (いずれの項目も信じていないという回答) から7点 (すべての項目を信じているという回答) までの8点尺度が構成される。

③回答者の属性による傾向を把握するために、「世代」と「性」という2つのカテゴリを組み合わせ、「戦前・戦中世代の男性」「戦前・戦中世代の女性」「戦後世代の男性」「戦後世代の女性」の4つのグループを作り、それぞれのグループごとの「宗教的信念尺度」の点数の平均値を算出し、その値を調査対象国ごとに比較した。それが図2である。

④ここで、それぞれの調査対象国は、先行研究にもとづいて、社会の「合理化 (rationalization)」と「機能分化 (functional differentiation)」という2つの指標を用いて順序づけられている。つまり、横軸を左に行くほど、これら2つの指標の値が小さくなり、逆に右に行くほどそれが大きくな

る。この2つの指標のかわりに、「国民一人当たりのGNP」などの経済指標を用いても、これらの国ぐにの順序づけの結果は、だいたい同じようになるであろう。

ii) 結果の読み取り (図2)

①社会の合理化・機能分化の進展にともなうて、人びとの「宗教的信念尺度」の点数の平均値は小さくなる。つまり、「宗教的信念」のレベルは低下していく。

②男性の場合も、女性の場合も、「戦前・戦中世代」にくらべて「戦後世代」の方で平均値は小さくなる。

③どの世代をとっても、「女性」は、「男性」よりも高い平均値を示す。

④以上から、つぎの2つの結論の方向が示唆される。

1つは、時系列的な宗教性の変化であり、それは時代の推移にともなう、人びとの「宗教的信念」の低下の方向ということである。こうして、このような測定指標を利用する限りにおいて、「世俗化仮説」は、調査データを用いて実証的に確認できたといえるのである。

もう1つは、「女性は男性よりもより宗教的である」という宗教性についての性差である。この点は、これまでさまざまな国際比較調査において、確認されてきている。しかし、なぜこのような性差がでてくるのかについては、これまで必ずしも納得できる説明はなされていない。

2. 宗教変形理論からの諸仮説の確認

(1) データ分析の方法

①宗教変形理論の中心は、「新しい宗教性」が「伝統的な宗教性」に取って代わるという仮説 (replacement hypothesis) である。では、その「新しい宗教性」の具体的な内容がどのようなものかという点については、「スピリチュアリティ」をも含めて、さまざまな議論がなされてきている。

②ここでは、Inglehart (1990) の議論を取りあげる。すでに述べたように、Inglehartは、「新しい宗教性」を捉える指標として、「あなたは、人生の意味について考えることが、どのくらいあり

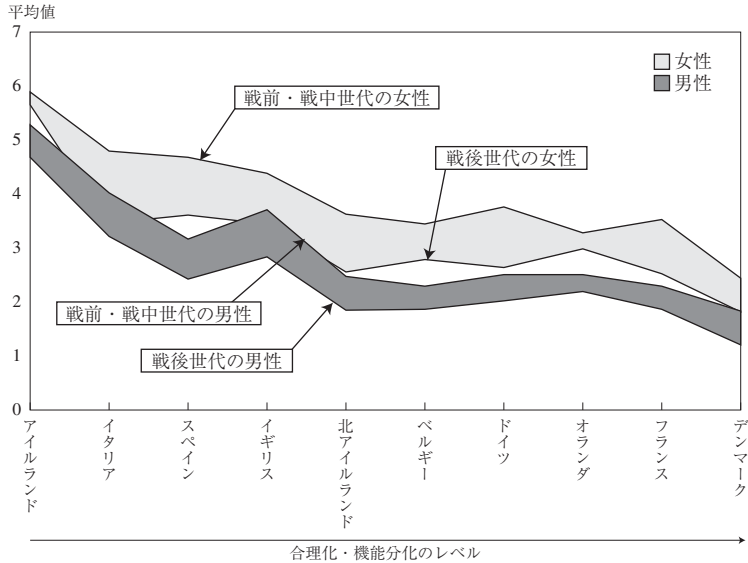


図2 宗教的信念尺度の点数の平均値
——WVS 1990の結果——

ますか」という質問項目を用いることを提案している。この提案をめぐっては、その後、賛否両論の議論が続いている。しかし、ほかに適切な測定項目の開発がなされていない現状にあっては、この質問項目の利用は、やはり得策といえよう。

③では、この質問項目を用いて、どのようにして「取って代わり仮説」を確認することができるであろうか。ここでは、つぎのような考え方をとる。

「新しい宗教性」が「伝統的な宗教性」に取って代わるとするならば、それぞれの宗教性を捉えようとする質問項目に対する回答者の%の合計、つまり「神を信じる」という回答者の%と「人生の意味について考える」という回答者の%の合計は、「物質主義者のグループ」と「脱物質主義者のグループ」において、ほぼ等しいものとなるはずである。

このことを確かめるために、WVSの1981年と1990年のデータを用いて、Inglehartの「価値観インデックス」にもとづいて、回答者を「物質主義者」「混合タイプ」「脱物質主義者」の3つのタイプに分けた上で、それぞれのタイプの回答者の「神を信じる回答者の%」と「人生の意味について考える回答者の%」を合計した%を計算し、その結果を表1に示した。

(2) 結果の読み取り (表1)

表1から、いずれの年度の調査においても、そしてほとんどの国において、「物質主義者」における合計%は、「脱物質主義者」における合計%よりも、その値が大きいことがわかる。この結果からするならば、「取って代わり仮説」は、ここでは確認できなかったといわざるをえない。さらなる方法論的な検討と開発が、今後に残された課題といえよう。

3. 宗教市場理論からの諸仮説の確認

(1) 分析の方法

宗教市場理論の基本的な仮説は、「ある社会において、人びとの『宗教的実践』のレベルが低いとするならば、それは人びとの『宗教的な需要』のレベルが低いことの結果であるよりも、むしろ『宗教的な供給』のレベルが低いことの結果である」というものである。

では、このような仮説は、調査データを用いて、どのように実証的にテストすることができるであろうか。

まず、「宗教的な需要」をいかに測定するか、というところから始める。

ここでは、「神を信じるか」と「死後の世界を信じるか」という2つの質問項目から「宗教的な

表1 「物質主義型」「混合型」「脱物質主義型」の回答者における「伝統的な宗教性」と「新しい宗教性」を合算した%
——WVS 1981 と 1990 の結果——

	1981年			1990年		
	物質主義者	混合型	脱物質主義者	物質主義者	混合型	脱物質主義者
ハンガリー	76	71	76	81	79	73
デンマーク	79	75	65	76	72	58
オランダ	79	77	67	87	74	65
フランス	80	77	75	78	76	72
ドイツ	91	85	71	88	86	76
イギリス	89	86	78	86	86	78
ベルギー	91	89	88	82	79	75
北アイルランド	96	99	88	98	96	98
イタリア	96	92	84	97	95	89
スペイン	98	93	84	95	90	80
カナダ	98	97	92	97	94	90
アイルランド	99	98	91	98	98	97

需要」を捉える指標を作成する。それは、ユダヤ-キリスト教 (Judeo-Christian) の国ぐににおいては、これら2つの質問項目の少なくとも1つに肯定的に答える回答者は「超越的なリアリティ (a transcendental reality) への関心」、つまり「宗教的な需要」があると考えられるのであり、そして、いずれの質問項目に対しても否定的に答える回答者は、「宗教への関心」、つまり「宗教的な需要」がないといわざるをえないからである。

この2つの質問項目は、WVS とともに、「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme: ISSP)」にも含まれている。まず、後者の ISSP では、この2つの質問項目においては5ポイント・スケールの形がとられている。したがって、この2つの質問項目のいずれに対しても「まったく信じない」と答える回答者を「宗教的な需要のない人」とする。

つぎに、WVS では、「神」「死後の世界」は、すでに述べたように、「天国」「地獄」「悪魔」「罪」「霊魂」とともに、「二分法 (dichotomous) の回答形式 (信じる/信じない)」で尋ねられている。二分法であるところから、2つの質問項目に対して回答者が「信じる」「信じない」とはっきりとした判断ができないような場合には、その人は「無回答 (no-answer)」を選ぶ可能性が高くなり、そのような人も「宗教的な需要のない人」

に入れるならば、「宗教的な需要のない人」の数を過大に見積もることになる。そこで、ここでは、これら2項目だけでなく、それ以外の5項目も含めて、それら7つの項目のいずれに対しても「信じない」と答える回答者を「宗教的な需要のない人」とする。

以上のような操作をした上で、ヨーロッパの国ぐに——比較のために北米の国を加えた——における「宗教的な需要のない人」の割合 (%) を棒グラフで示した。それが図3である。

(2) 結果の読み取り (図3)

①それぞれの国——ドイツの場合は、「東ドイツ」と「西ドイツ」を分けて分析した——で、2種類の棒グラフが同時に示されている場合は、左側の棒グラフは WVS での%、右側の棒グラフは ISSP での%という形で、それぞれの調査結果を示した。このグラフから、WVS の結果と ISSP の結果は、だいたいにおいて対応したものとなっていることがわかる。ただ、「東ドイツ」「スロベニア」「オランダ」においては、ISSP の結果の方が、「宗教的な需要のない人」の%がより高くなっている。しかし、ここでの問題関心は、宗教への需要という点から見たヨーロッパの国ぐにの相対的な序列 (rank order) というところにあるので、WVS と ISSP の調査結果のこの程度の差異

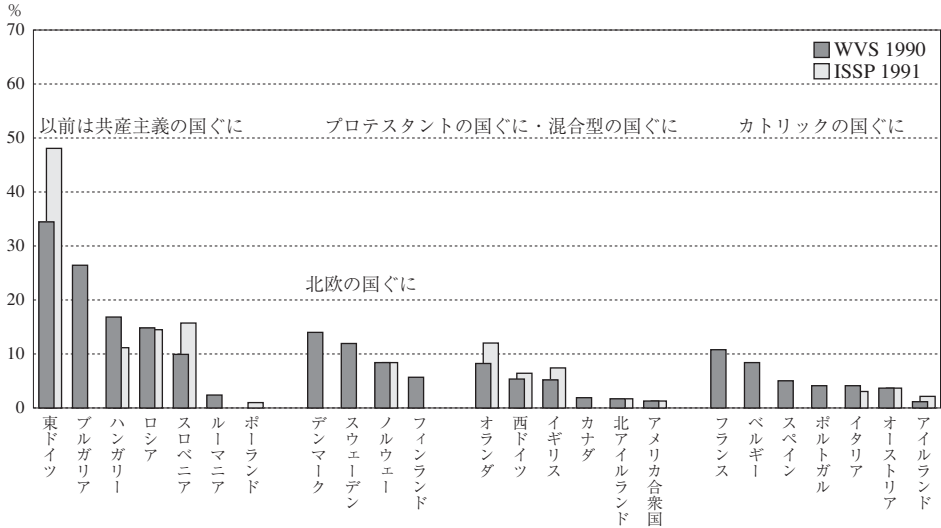


図3 各国ごと「宗教的需のない回答者」の%
——WVS 1990 と ISSP 1991 の結果——

はほとんど問題にはならない。

②各国ごとの「宗教的な需のない人」の%を見ていくならば、「世俗化の進展」が叫ばれるようになってきたにもかかわらず、その%はどの国においても決して高いものとはいえない。「宗教的な需のない人」の%が低いということは、逆にいえば「宗教的な需のある人」の%が高いということであり、そうだとするならば、この結果は、そもそも「世俗化理論（ミクロ・レベル）」に適合（fit）するものとはいえないということになる。すでに「世俗化理論」からの諸仮説の確認のところで、WVS の同じ7項目を用いて、時系列的な人びとの宗教的信念の低下の傾向という知見を報告したが、そのような知見は「世俗化理論」に適合するものであった。こうして、「宗教の変化に関する諸理論」の実証的な調査データによる確認においては、どのような measure や instrument を、どのように用いるかによって、異なる結果がでてくる——reality の異なる側面が見えてくる——ことになるのである。

③ここで分析に取りあげた国々には、いくつかのカテゴリで分類される。そのような分類にもとづきながら、図3の結果の読み取りを試みる。

まず、かつて共産主義の政治体制のもとにあった国々にて、「宗教的な需のない人」の%が相対的に高い。

つぎに、それとは対照的に、カトリックの国々に、とくにアイルランド、ポーランド、オーストリア、イタリア、ポルトガル、スペインで、「宗教的な需のない人」の%が相対的に低い。

しかし、プロテスタントの国でありながら、アメリカ合衆国、カナダ、北アイルランドでは、「宗教的な需のない人」の%は、カトリックの国々によりさらに低い。

そして、「北欧の国々に」と「オランダ・西ドイツ・イギリス」と「フランス・ベルギー」などは、以上の「宗教的な需のない人」の%が「相対的に高い国々に」と「相対的に低い国々に」の中間のところに位置している。

④ここでの結果については、「宗教市場理論」の考え方からするならば、つぎのような問題がでてくる。

1つは、なぜ「宗教的な需のない人」の%は、「アイルランド」や「ポーランド」といったカトリックの国々にで低い——つまり、逆にいえば宗教的な需は、カトリックの国々にで高い——のであろうかということである。「宗教市場理論」は、「宗教的な競争（competition）があれば、宗教的な供給が大きくなり、それによって宗教的な需も大きくなる」と考える。ところが、カトリックの国々には、このような「宗教的な競争」というものがほとんどない。それにもかか

ならず、結果は「カトリックの国ぐにでは宗教的な需要が高い」ことを示している。こうして、この結果は「宗教市場理論」に適合するものとはいえない。

もう1つは、全体としては、ヨーロッパの国ぐににおいては「宗教的な需要は低くない」という結果のなかにあって、なぜ「オランダ」では——「かつて共産主義体制のもとにあった国ぐに」「北欧の国ぐに」「啓蒙思想の大きな影響を受けたフランス」といった国ぐにと並んで——相対的に宗教的需要的レベルが高くないのであろうか。オランダにおいては、歴史的にカトリックとプロテスタントとの間に宗教的な競争が存在する。そうであるならば、「宗教市場理論」からするならば、宗教的な需要は高くなるはずである。ところが、データからするならば、その需要は高くない。この結果も「宗教市場理論」に適合するものとはいえない。

IV. 道徳の変化に関する諸理論と

その実証的な調査データによる確認

——道徳相対主義 (moral relativism) と道徳多元主義 (moral pluralism) ——

本稿では、道徳の変化に関する諸理論については、つぎのような点をおさえておくにとどめる。

①「宗教のゆくえ」についての予言 (proph-ecy) の内容とほぼ類似の内容が、「道徳のゆくえ」についても述べられてきた。

②近代化——合理化と機能分化——は、「伝統的な宗教性」とともに、「伝統的な道徳性」にも変化をもたらす。こうして、「新しい宗教性」とともに、「新しい道徳性」が出現する。

③「新しい道徳性」の具体的な内容は、「道徳多元主義」と「道徳相対主義」にまとめられる。

こうして、本稿では、このような「新しい道徳性」の出現という命題を調査データを用いて実証的に確認する。

1. 道徳相対主義

人びとの「道徳相対主義」の傾向を捉える指標として、WVS (1990) の「善悪の判断の基準」についての質問項目が利用できる。それは、A

「何が善で何が悪かについては、絶対的で明白な基準がある」、B「何が善で何が悪かについては、その時の状況によって決まる」という2つ意見をあげ、回答者がAに賛成か、Bに賛成か、どちらにも賛成できないか、を尋ねるというものである。

ここでは、Bの意見に対する賛成の回答を「道徳相対主義」の立場と考える。図4においては、このような回答者を「戦前世代」と「戦後世代」に分け、各国ごとにその%を、「戦前世代」を■、「戦後世代」を▲で表示し、それにもとづいて2つの世代グループについての「推定フィッティング曲線 (estimated fitting curve)」を描いた。

図4から、つぎのような知見を読み取ることができる。

①道徳相対主義者は、ヨーロッパの国ぐににおいては、すでに多数派になりつつある。

②道徳相対主義者の%は、デンマークとスウェーデンで高く、アメリカ合衆国で低い。

③「戦後世代」と「戦前世代」をくらべて、「戦後世代」の方で道徳相対主義者の割合が高い。アメリカ合衆国のケースを除いて、世代差はかなり大きい。

2. 道徳多元主義

WVS (1990) には、「道徳多元主義」についての、つぎのような質問項目が含まれている。それは、「拾った金銭の私物化」「ホモセクシュアル」「妊娠中絶」「離婚」「安楽死」などの事柄をバッテリー (battery) の形式であげ、それぞれが1「全く間違っている (全く認められない)」から10「全く正しい (全く認められる)」までの10ポイント・スケールのどこに位置づけられるかを判断してもらおう、というものである。

表2は、各国ごとの「戦前世代」と「戦後世代」のこれら諸項目に対する回答の分散 (variance) を示したものである。この分散の値が大きいほど、世代内での意見・考え方の一致が低い (つまり、「意見・考え方が多様である」=「多元主義的である」) といえる。例えば、ハンガリーの例でいえば、「拾った金銭の私物化」という項目については、戦前世代が8.53であるのに対して、戦後世代は10.52となっている。つまり、戦後世

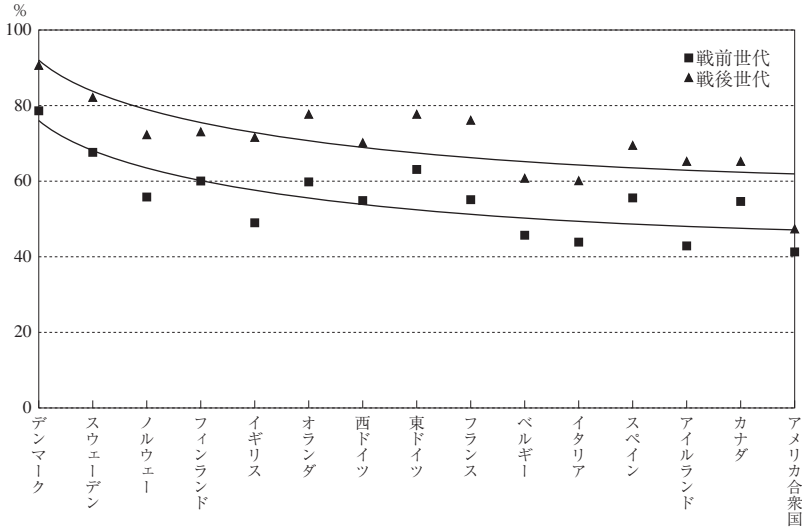


図4 各国の「戦前世代」と「戦後世代」における「道德多元主義者」の%
——WVS 1990 の結果——

表2 各国の「戦前世代」と「戦後世代」における「道德項目」に対する回答の分散
——WVS 1990 の結果——

	ハンガリー	デンマーク	スウェーデン	ノルウェー	フィンランド	イギリス	アイルランド	北アイルランド	西ドイツ	東ドイツ	オランダ	ベルギー	フランス	イタリア	スペイン	アメリカ合衆国	カナダ	
拾った金銭の私物化	戦前世代	8.53	1.87	2.66	2.50	3.02	2.25	2.47	1.58	4.96	3.93	2.92	7.78	5.78	6.98	7.87	6.51	6.69
	戦後世代	10.52	6.06	6.14	4.96	5.91	5.48	4.42	3.64	8.10	7.26	6.38	9.68	9.84	8.72	10.01	6.98 ⁿ	8.58
ホモセクシュアル	戦前世代	10.87	11.25	10.78	9.83	5.87	5.15	5.00	2.12	7.58	7.67	12.07	6.88	5.88	6.67	6.56	6.44	7.88
	戦後世代	10.02 ⁿ	10.81 [*]	12.79	12.60	11.03	7.86	8.24	5.76	11.00	11.29	7.48	10.09	9.24	10.16	10.57	7.79	9.50 [*]
妊娠中絶	戦前世代	9.43	—	7.32	7.84	9.54	5.45	2.67	4.57	5.05	6.76	7.58	6.64	6.78	7.27	7.18	7.47	7.57
	戦後世代	9.18 ⁿ	—	7.78 ⁿ	7.53 ⁿ	8.73 ⁿ	6.09 ⁿ	4.09	5.28 ⁿ	6.56 ⁿ	6.67 ⁿ	6.74 [*]	7.17 ⁿ	6.84 ⁿ	7.49 ⁿ	9.12	8.01 ⁿ	8.35 ⁿ
離婚	戦前世代	9.78	8.96	7.38	6.49	9.34	6.19	6.59	5.41	6.98	6.12	7.77	6.71	6.84	8.69	9.37	6.73	6.82
	戦後世代	8.66 [*]	8.13 ⁿ	7.34 ⁿ	7.02 ⁿ	6.77	5.19 [*]	7.02 ⁿ	5.90 ⁿ	5.90 ⁿ	6.69	6.35	6.37	6.19 ⁿ	7.83	8.67 ⁿ	6.70 ⁿ	6.36 [*]
安楽死	戦前世代	12.74	11.32	9.46	8.50	9.77	8.36	3.63	5.84	8.15	9.01	9.66	8.72	9.34	8.94	8.13	8.02	9.11
	戦後世代	12.73 ⁿ	10.21 ⁿ	8.93 ⁿ	8.28 ⁿ	8.42 [*]	7.36	5.54	6.98 ⁿ	9.22	10.03	7.19	8.23 ⁿ	8.25 [*]	8.60 ⁿ	10.43	7.28	8.37

〈注〉nは「戦後世代」と「戦前(中)世代」に有意差がないことを示している。*は10%レベルでの有意差があることを示している。それ意外の場合は5%レベル以下での有意差がある。

代は、戦前世代よりも、多元主義的であるということである。

では、各国ごと、項目ごとの結果は、すべてハンガリーの「拾った金銭の私物化」について見られた結果と同様の傾向——つまり、「戦後世代(若年の世代)」が「戦前世代(年配世代)」よりも道德多元主義が高くなるという傾向——を示しているかという、必ずしもそうとはいえない。

国ごとに、項目ごとに、結果はかなり複雑な様相を呈している。

V. おわりに

1. まとめと今後の課題

本稿の目的は、「ヨーロッパの国々における宗教と道德をめぐる多元主義理論は、調査データ

によって確認されるであろうか」という問いに、実証的に答えることであった。

そのため、宗教と道徳をめぐる多元主義論から実証的に検証可能な諸仮説を導きだし、それらを WVS や ISSP などの「質問紙法にもとづく多数の国ぐにを対象とする大規模な国際比較調査」のデータを用いて確認する試みを行ってきた。

その結果、宗教の変化についても、道徳の変化についても、それぞれについての諸仮説の「あるもの」については調査データを用いて確認できるものの、「ほかのもの」についてはそれができないということがわかった。

では、それは、なぜそうなのであろうか。一般に、「理論（から導き出される仮説）」が「データ」によって確認されない場合、つぎの2つの問題が考えられる。

①現象を説明する「理論」そのものに内在する問題

②「理論（的仮説）」を「データ」によって確認する方法の問題

これら2つの問題についての精緻な検討は、いずれも今後に残された大きな課題といわなければならない。ここで、とくに後者の②の方法論的な問題に関して、つぎの点を指摘しておきたい。それは、理論仮説の実証的なテストのための measurement instrument についてである。今回のデータ分析においては、この研究領域における理論仮説のテストのために利用可能な調査データと measurement instrument の広範な探索にもとづいて、WVS や ISSP の調査データと、そこで用いられているいくつかの質問項目を取りあげた。しかしながら、そのような実証的なテストにとって、今回の調査データや質問項目で十分であったかということ、残念ながら必ずしもそうではなかった。

例えば、宗教の変化に関する議論においては、さまざまな形で、「新しい宗教性」という考え方が展開されてきた。では、そのような「新しい宗教性」をどのような質問項目によって測定するかというと、それについては、Inglehart が提案した「あなたは、人生の意味や目的について考えることがどのくらいありますか」という質問項目以外ほとんど利用できるものがない。この研究領域に

おいては、このような理論変数に対応する経験変数の開発がまさに喫緊の課題であるといわなければならないのである。

2. 宗教の変化に関する諸理論と諸知見をめぐる考察——今後の理論的・実証的研究のための仮説的な議論——

宗教の変化をめぐるここでの仮説的な議論は、以上の理論的・実証的な検討と分析から導かれるものである。そのような検討と分析をとおして、社会の近代化は必ずしも宗教を消滅させてしまうわけでもなければ、宗教市場における供給が必ずしも宗教への需要をもたらすわけでもないことがわかってきた。ここから、宗教の変化は、これまで考えられてきたほどには、社会の変化の影響を受けないのではなからうかという疑問がでてくる。そして、そうだとするならば、何が「宗教のゆくえ」にとっての重要な要因となるのであろうか。この点について、筆者は、

①宗教の「社会的な可視性 (public visibility)」

②宗教に向けての「社会化 (socialization)」

の2つを仮説的にあげたい。宗教が社会のなかでさまざまな形で「見える存在」であり続けるならば、人びとはその存在をそれぞれの社会化の過程において意識 (awareness) 化することが可能となる。どのような宗教であっても、それが「公の (public) 舞台 (arena)・領域 (sphere)」において「公の役割 (role)・儀式 (rite)」をもつものであることが重要である。そうであるならば、宗教は「私的な世界 (world)」においても存在し続けることが可能となる。しかし、宗教が公的な場から撤退し、人びとがそれを社会的に見ることができなくなるとするならば、宗教は「社会化」の過程において、その根っこを失うことになり、もはや人びとの私的な世界においても生き残ることが困難になる。そして、宗教がいったん公的な領域から消え失せるとするならば、それが再活性化 (revitalized) されるのは容易なことではないであろう。

さて、以上のような仮説的な議論からするならば、Luckman (1967) のいう、「見えない宗教 (invisible religion)」という考え方は、実証科学の視座からするならば、やはり「ありえない」ことと

いわざるをえないのではなかろうか。いうまでもなく、Luckman は、一方で制度化された宗教の衰退を描きだすとともに、他方で「私化され」「個人化され」「社会的に見えなくなった」宗教の存続を予測した。しかし、「社会的」に「見えなくなった」宗教が「私的」に「存続する」ことはきわめて困難であるというのが、ここでの仮説的な議論である。

こうして、以上のような仮説的な議論の実証的なテストの試みこそが、今後に残されたきわめて興味ぶかい課題となってくるのである。

参考文献

- Bruce, Steve (2011). *Secularization*. Oxford : Oxford University Press
- Dobbelaere, Karel (1981). "Secularization : A Multi-dimensional Concept." *Current Sociology* Vol. 29, No.2.
- Finke, Roger and Stark, Rodney (1992). *The Churching of America, 1776-1990 : Winners and Losers in our Religious Economy*. New Brunswick, NJ : Rutgers University Press.
- Glock, Charles Y. and Stark, Rodney (1965). *Religion and Society in Tension*. Chicago : Rand McNally.
- Iannaccone, Laurence R. (1988). "A Formal Model of Church and Sect." *American Journal of Sociology*, 94.
- Iannaccone, Laurence R. (1990). "Religious Practice : A Human Capital Approach." *Journal for the Scientific Study of religion*, 29/3.
- Iannaccone, Laurence R. (1991). "The Consequence of Religious Market Structure." *Rationality and Society*, 3/2.
- Inglehart, Ronald (1990). *Culture Shift in Advanced Industrial Society*. Princeton : Princeton University Press.
- Inglehart, Ronald (1997). *Modernization and Postmodernization*. Princeton : Princeton University Press.
- Luckmann, Thomas (1967). *The Invisible Religion*. New York : Macmillan.
- Luckmann, Thomas (1995). "The Social Forms of Religion." In : Andrew M. Greeley (ed.) *Sociology and Religion*. New York : Harper Collins.
- 真鍋一史 (2010). 「欧米社会学における宗教理論と宗教調査」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第4号.
- Pollack, Detlef and Olson, Daniel (2008). *The Role of Religion in Modern Societies*. New York : Routledge.
- Popper, Karl R. (1963). *Conjectures and Refutations : The Growth of Scientific Knowledge*. London : Routledge and Kegan Paul.
- Wilson, Bryan R. (1976). *Contemporary Transformation of Religion*. Oxford : Oxford University Press.
- Wilson, Bryan R. (1982). *Religion in Sociological Perspective*. Oxford : Oxford University Press.
- Wilson, Bryan R. (1985). "Secularization : the Inherited Model." In : Philip E. Hammond (ed.) *The Sacred in a Secular Age*. Berkeley : University of California Press.

Religious and Moral Pluralism in Europe: Theoretical Discussions and Empirical Findings

ABSTRACT

In this paper, we first briefly characterize what is meant by religion without engaging the endless discussions on the true meaning or definition of religion. In the sociology of religion, religion relates to the macro-, the meso-, as well as the micro-levels. At the macro-level, we call certain teachings, doctrines or dogmas a “religion.” We also distinguish between more or less religious societies. At the meso-level, a religion is understood as an organization like a church or a religious community. At the micro-level, religion is considered the property of an individual. We usually do not call this aspect religion, but religiosity. This paper focuses exclusively on this micro-level.

The conceptually distinguished dimensions of religiosity include practice, beliefs, experience, knowledge, and moral consequences. Based on empirical findings, we treat morality as a separate dimension. Theories of religious change usually do not distinguish between the remaining dimensions. In this paper, we focus on two dimensions, namely practice and beliefs.

The first section outlines theories and hypotheses of religious change. They are (1) “secularization” or “decline of religion” hypotheses, (2) “transformation” or “replacement” hypotheses, and (3) “religious market” or “economical approach” hypotheses. These major hypotheses are empirically tested in the second section. For this purpose, large-scale data sets from WVS, ISSP, ALLBUS, and European Election Studies are used. In the last section, the problem of moral change is discussed.

The results of data analyses suggest the directions of religious and moral pluralism. However, for the final conclusion, there remains a vast field for further research.

Key Words: religious pluralism, moral pluralism, macro-, meso-, and micro-levels, secularization theory, religious transformation theory, religious market theory, religious practice, religious beliefs, new religion/spirituality/the meaning of life